

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21H00781

研究課題名（和文）「自撮り」のメディア文化史

研究課題名（英文）Media Cultural History of the "Selfie"

研究代表者

長谷 正人（Hase, Masato）

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：40208476

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、21世紀におけるデジタルカメラとスマートフォンの大衆的な普及によって、誰もが日常的に写真や動画を撮影したり、されたりするようになった映像文化の急激な変容を、「自撮り」に焦点を当て、社会学と美学の視点を交差させながら捉えようとしたものである。20世紀の映像文化は、撮影所やテレビ局などの専門家の手によって制作され、大衆は明確にそれらを「見る」立場に置かれていた。しかし21世紀の映像文化では匿名の人びとも自ら映像を撮影したり、撮影されたり、インターネット上にアップしたりする。このような新しい映像文化に光を当てて、それを研究するためのメディア史的視座を提供したことが最大の成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

21世紀においては、スマートフォンとデジタルカメラの大衆的普及によって、誰もが映像を撮ったり、撮られたりする社会が到来した。「自撮り」に代表されるように、人びとは写真や動画を撮ること／撮られることを日常的に楽しむようになった。しかし、そうした新しい文化現象の社会的意味はどこにあり、その文化を豊かにするにはどうしたらよいかについて私たちはまだ理解できていない。学術研究においては、写真、映画、テレビを作品として研究することを先鋭化させるばかりで、この新しい映像文化の意味を問題にしていない。本研究は、ふつうの人びとが映像を撮ったり撮られたりする現象にどんな意義があるかを探究するところに意義をもつ。

研究成果の概要（英文）：This study has attempted to capture the rapid transformation of visual culture in the 21st century, when the mass diffusion of digital cameras and smartphones has led to everyone taking and being taken photos and videos on a daily basis, by focusing on “selfies” and intersecting the perspectives of sociology and aesthetics. In the 20th century, visual culture was produced by specialists at film studios and television stations, and the public was clearly placed in the position of “watching” these works. In the 21st century, however, anonymous people are also shooting their own images, being filmed, and uploading their images to the Internet. The greatest achievement of this project was to shed light on this new visual culture and to provide a media historical perspective from which to study it.

研究分野：社会学

キーワード：自撮り メディア文化 スマートフォン・カメラ

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

21世紀に入る頃から、カメラのデジタル化と小型化、または携帯電話との一体化が進むと同時に、YouTube や Zoom といったオンライン・サービスが普及したことで、従来の映像文化には大規模な変動が生じるようになった。本研究は、こうした映像文化の歴史的な変容を独自の視点から捉え直すために、とりわけ「自撮り」という新しい映像文化の実践に着目して考察することにした。

20世紀までの映像文化は、たとえば、肖像写真を家族や国民国家を象徴するものとして部屋に掲げたり（御真影や先祖写真など）、家族が子どもたちの成人式や結婚式などの通過儀礼を迎えるたびに写真を撮影したり（写真館での撮影など）、写真的な文化実践は多くの場合に、非日常的な一場面を記録する儀式的なもののみなされてきた。そのことはまた、映画やテレビのなかに現れる俳優たちを人びとがスターとして崇拜したり、それをカメラに収める映画監督が創造的な才能を持つ送り手として神秘化されたりしていたこととも並行した現象であったと考えられる。つまり、写真や映画、テレビなどの映像文化は、非日常的な一場面を記録し、それを華々しく表現するメディアとして機能することがほとんどであった。

そうした20世紀の映像文化における「非日常性」の傾向に対応するかたちで、それを論じる学問領域の世界においても、一方には映画やテレビを受容する人びととその効果に注目する観客論やオーディエンス研究などの社会学的な研究があり、他方では、写真家や映画監督たちの創造的な手法と作品の特性を明らかにする作家論＝美学的な研究手法があった。しかしながら、先に述べたように、21世紀に入る頃から生じたメディア環境の劇的な変容は、20世紀的な映像文化についての理解や既存の研究手法が通用しなくなったことを示している。

実際、スマートフォンと一体化したデジタルカメラは、その小型化と機動性もあって、ありふれた日常的な光景や人物の様子を被写体とした匿名の人々の撮影によるカジュアルな映像を無数に生み出し、その撮影行為そのものがもはや非日常的なものでも儀式的なものでもなくなりつつある。と同時に、それがインスタグラムや YouTube を通して共有され、いつでもどこでも自在に視聴されているという状況は、その撮影者たちが送り手であると同時に受け手でもあるという事態を急速に広めている。そうして制作された映像の内容は、日常かつ平凡な生活のなかで、無名の人々が自分自身を含めた身の回りの光景を撮影したり撮影されたりすることを繰り返し、個人的な表現活動に取り組むことを促していると言える。

なかでも私たちが「自撮り」という行為が目にしたのは、なにも最近の映像技術の変化によって生じた新しい流行現象であるという理由だけからではない。それはなにより、自撮りという撮影行為が、上述のような日常と非日常、撮影者と被写体、送り手と受け手といった、20世紀の映像文化論を支配してきた二元論的構図を切り崩すようなパーソナルな特性を帯びているからである。自撮りの場合、撮影することとそれを鑑賞すること、さらにそれを他者と共有することという文化的実践が一人の人間によって同時におこなわれていることから明らかに、現在の映像文化は、もはや20世紀のように特権的な作り手と大勢の受け手によって成り立つものではなくなった。そのため私たちは、従来の社会学的ないし美学的な研究手法を更新する必要性に迫られている。実際に、多くが無名の人々によって進められ、各地域ごとに固有の文化として展開されてきた映像文化の歴史に着目するヴァナキュラー写真論は、こうした状況に呼応して登場した方法論であったと言える。

こうして本研究は、ヴァナキュラーな映像文化が溢れかえるようになった現在の映像文化を背景として、そうした状況に対する新たな研究手法を検討する必要性から開始された。

### 2. 研究の目的

本研究「「自撮り」のメディア文化史」の目的は、以上のような、21世紀に入る頃から映像文化が大きくパーソナルなものに変容したという理解のもと、それを「自撮り」という新たな文化現象に注目しつつ歴史的な視点から再考することである。

ここでの「自撮り」とは、何も携帯電話によって自分自身を写真や動画に撮影する行為に限られない。たとえば、コロナ禍をつうじて多くの人々が経験したビデオ会議のように、パソコンに備え付けられたカメラを前に話しつつ、その自分の姿をリアルタイムでモニターしながら調整するといった行為は、好むと好まざるとにかかわらず広く浸透している。こうした事例もまた「自撮り」にほかならず、とりわけ対人的なコミュニケーション行為にまで不可避に映像技術が介在するという点において、現在の映像文化を象徴するものとなっている。

このように日常的なメディア環境において生じる映像文化の変容を捉えるために「自撮り」は格好の分析対象になると考えられる。ただし、現在に頻出している自撮りの状況を調査するだけでは、単なる技術決定論にとどまるばかりか、スマートフォンを構えて自身の体を窮屈そうに収めようとする行為が、かくも頻繁に繰り返されることになった理由や快楽を明らかにすることにはつながらないだろう。さらに言えば、上記のように映像文化を捉える研究手法が社会学と美学に分裂していたために、自撮りのような、匿名の人々の実践という意味では社会的であり、表現活動という意味では美学的であるような独特の実践が取り逃がされてしまった。

そこで本研究は社会学者と美学者が共同して、自撮りという新しい映像文化を単なる一過的な

現象やブームとしてではなく、W・ベンヤミンの複製技術論やM・マクラーハンのメディア論がそうであったように、映像を撮影し、共有し、受容する文化的行為を、人類史的な視座から検証するという方法を取ることにした。より具体的には、19世紀以降に写真や映画、テレビなどをめぐる諸々の実践との比較作業をつうじて、自撮りという表現行為が映像文化史においていかなる位置付けにあるのかを明らかにする作業を進めることとなった。

### 3. 研究の方法

以上のように「自撮り」という事例から映像文化を考察するため、本研究のメンバー（合計9名）は、社会学と美学を専門とする研究者（各4名）から構成され、それぞれの観点から交わした議論を代表者が統括するかたちで進めてきた。また、自撮りを現代的な事例に即して考察する「現代メディア文化班」（前川、加藤、角田、松谷）と、それを歴史的な観点から再考する「メディア史班」（菊池、大久保、増田、川崎）に役割を分担し、それぞれに社会学と美学の研究者を振り分けることで作業の効率化を図った。

定期的な研究会は、ほとんど全員が揃うかたちで3年間に各5回ずつの計15回にわたり開催し、最終年度には対面開催へと戻ったこともあり、議論をさらに深めることができた。それらの内容は主に、重要な先行研究の文献読解や個人発表をもとに議論することで進められたが、関連するテーマについて識者を招聘したゲスト講演も合計4回、実施することができた。

3年間の研究会の日程とテーマは、以下のとおりである。

#### 2021年度（報告内容と担当者名）

- 4/24 第1回研究会：H・ジェンキンス『コンヴァージェンス・カルチャー』（前半・加藤）
- 6/12 第2回研究会：H・ジェンキンス『コンヴァージェンス・カルチャー』（後半・加藤）
- 7/31 第3回研究会：R・ウィリアムズ『テレビジョン：テクノロジーと文化の形成』（長谷）
- 10/23 第4回研究会：ゲスト講演（溝尻真也氏「アトラクションとしてのビデオとそのイメージ」）
- 3/5 第5回研究会：ゲスト講演（久保友香氏「自撮り」技術と若年女性の「盛り」コミュニケーション」）

#### 2022年度

- 5/28 第6回研究会：ゲスト講演（谷本奈穂氏「調査からみる現代日本の美容整形」）
- 8/27 第7回研究会：自著の構想発表および最近の自撮り研究の調査報告（松谷、増田）
- 10/29 第8回研究会：Lisa Cartwright and D. Andy Rice, “My Hero: A Media Archaeology of Tiny View FINDERLESS CAMERAS AS TECHNOLOGIES OF INTRA-SUBJECTIVE ACTION”, 2016（増田、松谷）
- 12/10 第9回研究会：同上
- 2/4 第10回研究会：Doron Altaratz and Paul Frosh, “Sentient Photography: Image-Production and the Smartphone Camera”, 2021（前川、菊池）

#### 2023年度

- 4/4 第11回研究会：Kathrin Peters and Andrea Seier “Home Dance: Mediacy and Aesthetics of the Self on YouTube”, 2009（加藤、増田）
- 7/15 第12回研究会：「身体になったカメラ」「自撮り」映像論」（前川）
- 8/29 第13回研究会：次回科研費申請に向けた個人研究発表（全員、以降は対面に移行）
- 12/10 第14回研究会：前田潤『漱石のいない写真：文豪たちの陰影』（長谷）
- 3/16 第15回研究会：ゲスト講演（ショーン・ハンスン氏「Economies of Nensha in the Age of Ubiquity」）

### 4. 研究成果

#### ・研究会による成果

本研究はまず、「現代メディア文化班」の重要な先行研究として、コスプレ文化など「自撮り」と類似した表現活動を進めるファン活動に注目したものから検証を開始した。そうした研究は、「自撮り」に代表されるような個人による表現活動に迫ろうとするが、いまだ日常と非日常ないしは送り手と受け手といった構図に収まるものが少なくない。そのため、これに続けて国内の研究者をゲストとして招聘した研究会を連続的に開催することになった。具体的には、70年代のラブホテルに設置されたコイン式自動撮影機を使って自分たちの性行為を録画して見るという先駆的な「自撮り」文化を検証した溝尻真也氏、自撮りにおいて重要な要素となる「盛り」について著作を発表した久保友香氏、それとも関連して、昨今の美容整形について文化社会学的な考察を進める谷本奈穂氏である。以上の三者の知見を踏まえて先のファン研究の問題点を補完しつつ、送り手/受け手や日常/非日常を横断していくような「自撮り」文化の前史や特性について活発な議論を深めることができた。

こうした議論をもとに2年目は当初、昨今の自撮りブームを直接的な対象とする写真論についての調査を進めたが、その多くは自撮りをナルシシズムの発露として批判するか、政治的な意見

表明として称揚するものに偏りがちであり、結果として映像文化史としては狭小なものになってしまったものが多かった。ただ、そうした議論のうちでは異色の論文として、カメラのファインダーの有無に着目しつつ20世紀初頭から現在のGoProにいたる撮影行為をメディア考古学的に検証した、リサ・カートライトらによる独創的な議論があり、その可能性と問題点について会合で詳細に議論した。また、そうした議論を現在の事例へと接続する事例として、スマートフォンの写真アプリやストリートビューなどの自動化に着目し、それらを感知能力や体性感覚との関係から論じたポール・フロッシュらの論考を精読することも進めた。このようにして、メディア史的な視座からカメラの小型化や機動性を再考した議論は、19世紀末以降の歴史的な観点から自撮り文化を再考するにあたって有意義なものとなった。

最後に3年目は、自撮りという現象を中心として、映像文化の変容をあらためて人類史的なパースペクティブから再考する作業を中心に進めた。ここではYouTube上に投稿した動画をヴァナキュラーな表現として検証した論文の読解作業に始まり、続けてメンバーが各自、自撮り映像にまつわる個人的なアイデアや考察を共有することから、「自撮りの現象学」と「カメラの考古学」という論点が浮上した。その後、明治・大正期の新聞写真を独自の視座から検証した、前田潤の著書についての検討会、そして念写という得意な心霊現象を通信という観点から独自に再考したハンスン氏のゲスト講演によって、自撮り文化を人類史的な視座へと拡張しつつ展開する方向性を確認することもできた。

#### ・個人による成果

上記の研究会による議論は、以下のリストにもあるメンバー各自の業績へと反映もしくは展開するかたちで成果を公開した。以下、研究代表者および各班のメンバーごとに、代表的なものについて紹介していく（詳細な書誌情報については、以下リストを参照のこと）。

研究代表者の長谷は、この研究プロジェクト以前の段階から準備を進めていたものとして、独自の映像文化・メディア論を展開するトム・ガニングの論考を日本語で独自に編纂・翻訳した論集『映像が動きだすとき 写真・映画・アニメーションの考古学』を、これに続けて、先にも挙げたリサ・カートライトが科学技術との関係から20世紀以降の映画を考察した著書『X線と映画』の翻訳を監訳者として発表した。なお前者の共訳者には、本科研メンバーからも多くが参加した（前川、松谷、菊池、増田、川崎）。さらに長谷は、論考「運賃重彦：映画の反＝メディア的可能性」（『映画論の冒険者たち』所収）や「サブカルチャーとしての村上春樹と自主映画」（『村上春樹 映画の旅』所収、編者は川崎佳哉）もしくは「映像とスペクタクル」（『スペクタクル後 第14回恵比寿映像祭コンセプトブック』所収）や「ヴァナキュラー・モダニズムとしてのクレイジーキャッツ」『シミュレーションとしての山田太一ドラマ』（ともに雑誌『ユリイカ』所収）などによって、それぞれ映画とテレビを事例として上記の研究会の成果を踏まえた議論を展開した。

「現代メディア文化班」（前川、加藤、角田、松谷）のうち、特に前川が、自撮りに直接的にかかわる考察を、日本映像学会での発表「身体になったカメラ 「自撮り」映像論」や論文「スクリーンショット論 ポストモダン以降の写真／アート／日常」として発表した。また、加藤はテレビについての調査と考察を講演や論考などによって、また角田は現代日本の写真作家による手法を検証した論考などを発表した。そうして両者が社会学的な観点からテレビと写真の美学的な特徴に迫る一方、松谷は逆に美学的な観点から、現在の作家たちによる芸術実践や戦争をめぐる映像を複数の論文や国内外の学会で発表することにより、双方の領域を交差させるような議論を展開した。

「メディア史班」（菊池、大久保、増田、川崎）のメンバーから、菊池は19世紀の写真実践とアーカイヴの関係について論じた論考を発表したほか、大久保は単著『これからのメディア論』において多種多様な視聴覚文化を取り上げ、さらに共訳での『メディア考古学とは何か』（ユッシ・パリッカ著、2023）などと併せて、それぞれ映像文化史を再編するような議論を発表した。増田は、20世紀初頭から中頃にかけてのアニメーションやマンガをそれぞれ科学史やテレビ文化史と接続する論考を中心に、また川崎は先に挙げた編著『村上春樹 映画の旅』や『映画論の冒険者たち』に寄稿した論文などに、それぞれ上記研究会の成果を反映させることができた。

全体として本研究は、「自撮り」という具体的な事例を出発点としつつ、それと関連する事例や表現を写真、映画、テレビ、マンガなどの複数のメディアとの関係において確認することができた。もちろん、自撮り文化の欲望や快楽を明確にするためには、さらなる議論や考察が必要となるが、そうした人々の欲望を、まずは19世紀以降の映像文化史のうちに見定める歴史的な視座を設定できたことから、冒頭に挙げた本研究の目的はおおよそ達成できたと言える。今後も各自がそれぞれの議論を展開しながら先の研究会も継続しており、さらに編著書のかたちにまとめることも検討中である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計22件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 長谷正人	4. 巻 第56巻第5号
2. 論文標題 シミュレーションとしての山田太ードラマ	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 186-193
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前川修	4. 巻 47号
2. 論文標題 スクリーンショット論 ポストモダン以降の写真 / アート / 日常	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 美術フォーラム21	6. 最初と最後の頁 110-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤裕治	4. 巻 第24巻
2. 論文標題 「映像」からのテレビ論に向けて クローズアップを手がかりとして	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 静岡文化芸術大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 33-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川崎佳哉	4. 巻 第56巻第5号
2. 論文標題 「残ること」をめぐる葛藤のドラマーー山田太ーと『岸辺のアルバム』	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 130-136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松谷容作	4. 巻 18号
2. 論文標題 月との遭遇 ポスト地球の美学によるJAXA「月面農場」に対する批判的考察	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 追手門学院大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 47-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Nobuhiro Masuda, Yosaku Matsutani, Yasuharu Akiyoshi, Juppo Yokokawa, Kazuhiro Jo	4. 巻 2023
2. 論文標題 Two Approaches to Human-decentred Design: Between Life and Matter	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 WDO Research and Education Forum 2023 Proceedings / Design Beyond	6. 最初と最後の頁 99-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 増田展大	4. 巻 2023
2. 論文標題 閃光が照らし出すもの(What the Flash Illuminates)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 栗山斉 無にみつもの(展覧会カタログ)	6. 最初と最後の頁 46-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 増田展大	4. 巻 2023
2. 論文標題 パララックス・ビュー 永田康祐をめぐる視差的考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 DAZZLER Kyoto Art Center Co-program2022 Category B (林修平編(展覧会カタログ))	6. 最初と最後の頁 55-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷正人	4. 巻 55巻2号
2. 論文標題 労働としての映画 『勝手に逃げる/人生』におけるゴダールの転回をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 519 - 525
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前川修	4. 巻 第4号
2. 論文標題 影像与照片之間：壺異攝影的譜系学	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 《北大芸術評論》	6. 最初と最後の頁 15 - 25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前川修	4. 巻 第45号
2. 論文標題 前衛の理論の系譜：遊行と回帰	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 美術フォーラム21	6. 最初と最後の頁 17 - 23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松谷容作	4. 巻 第17巻
2. 論文標題 日本の現代アートにおける重ね合わせの映像についての一考察 山城知佳子《あなたの声は私の喉を通った》(2009)と伊東宣明《死者/生者》(2009)を例として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 追手門学院大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 95-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大久保 遼	4. 巻 101
2. 論文標題 物質と環境：ユッシ・パリッカの物質主義的メディア理論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 メディア研究	6. 最初と最後の頁 157～174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24460/jamsmedia.101.0_157	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 増田展大	4. 巻 54巻8号
2. 論文標題 非人間の食と性 『ケモノヅメ』の形態学的試論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 206-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 増田展大	4. 巻 16号
2. 論文標題 イリュージョンとアニメーション 現代のロボティクスとの交錯をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 叢書セミオトポス16 アニメの人間（日本記号学会編）	6. 最初と最後の頁 96-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 角田隆一	4. 巻 74巻2・3合併号
2. 論文標題 社会学的なフォト・プロジェクトのために	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 横浜市立大学論叢（人文科学系列）	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 川崎佳哉	4. 巻 54巻14号
2. 論文標題 ホーム/ムービーの可能性 三宅唱『やくたたず』をめぐる	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 224-232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Osamu Maekawa	4. 巻 n°4 [En ligne]
2. 論文標題 Thinking Ghost Photography	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Revue internationale de Photolitterature	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 前川 修	4. 巻 106
2. 論文標題 コロナの写真映像?	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 映像学	6. 最初と最後の頁 25~33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18917/eizogaku.106.0_25	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 増田展大	4. 巻 29
2. 論文標題 創造から発明へ カンギレムとシモンドンにおける技術論の系譜	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西日本哲学年報	6. 最初と最後の頁 21~39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Nobuhiro Masuda, Juppo Yokokawa, Kazuhiro Jo, Yosaku Matsutani	4. 巻 -
2. 論文標題 Living Images, Inert Humans: Vitality of the Images Appearing in Chromatophony and A Wave	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The proceedings of The Sixth Transdisciplinary Imaging Conference: Dark Eden	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.6084/m9.figshare.16993312.v2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松谷容作	4. 巻 60
2. 論文標題 土とアート - - 三原聡一郎《土をつくる》をめぐる一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 國學院大學紀要	6. 最初と最後の頁 71~91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件(うち招待講演 3件/うち国際学会 9件)

1. 発表者名 前川修
2. 発表標題 身体になったカメラー「自撮り」映像論ー
3. 学会等名 日本映像学会関西支部第97回研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yosaku Matsutani
2. 発表標題 Soil, (De)compose, Art: Soichiro Mihara 's Making Soil (In the Panel "(De)composing Media Art through Practices with Nonhuman Agencies")
3. 学会等名 Re:source 2023, The 10th International Conference on the Histories of Media Art, Science and Technology (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yosaku Matsutani
2. 発表標題 Art as Decomposition: Soichiro Mihara's Making Soil
3. 学会等名 Taboo - Transgression - Transcendence in Art & Science (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yosaku Matsutani
2. 発表標題 Encounter with the Moon : Ethics and Aesthetics of the Post-Earth Era
3. 学会等名 The 22nd International Congress of Aesthetics (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Nobuhiro Masuda, Yosaku Matsutani, Yasuharu Akiyoshi, Juppo Yokokawa, Kazuhiro Jo
2. 発表標題 Toward Nonhuman-Centered Design: Between Life and Matter
3. 学会等名 World Design Assembly Tokyo 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 増田展大
2. 発表標題 想像と物質のメディア考古学 『メディア考古学とは何か?』をめぐって
3. 学会等名 日本メディア学会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Nobuhiro Masuda
2. 発表標題 Toward Decomposition as Resources for Media Art: Conclusive Remarks
3. 学会等名 Re:source 2023, The 10th International Conference on the Histories of Media Art, Science and Technology (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松谷容作
2. 発表標題 戦争をめぐる映像と感性的なもの
3. 学会等名 表象文化論学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 増田展大
2. 発表標題 画像とノとしてのマンガ 『テレビくん』を事例として
3. 学会等名 第70回九州マンガ交流部会例会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 増田展大
2. 発表標題 客観性はどこにあるのか
3. 学会等名 表象文化論学会第15回研究発表集会 (ワークショップ2「ダストン/ギャリソン『客観性』を読む」)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 増田展大
2. 発表標題 起源の映画にみるポスト・シネマ メディア、身体、リズム
3. 学会等名 京都大学映画メディア合同研究室第1回シンポジウム「ポスト・シネマの映像 ゆれる身体とメディアの今」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yosaku Matsutani
2. 発表標題 Mimesis and Environment on the Posthuman Condition in the Recent Art Works of Soichiro Mihara
3. 学会等名 POSTHUMAN MIMESIS: EMBODIMENT, AFFECT, CONTAGION (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yosaku Matsutani
2. 発表標題 Becoming Static: Experiences of Pathe Baby Before The Second World War in Japan
3. 学会等名 4th International Conference - Stereo & Immersive Media (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yosaku Matsutani
2. 発表標題 Making Soil
3. 学会等名 4th Renewable Futures Conference 2021 FeLT Futures of Living Technologies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yosaku Matsutani, Soichiro Mihara
2. 発表標題 An Infinite Cycle of Life and Death in Making Soil
3. 学会等名 Art and Critical Ecologies: Multiscalar Engagements (Panel 3: Art and Microbial Worlds) (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計13件

1. 著者名 伊藤 守 (大久保遼 (337-348)、増田展大 (216-228)、松谷容作 (241-255))	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 400
3. 書名 メディア論の冒険者たち	

1. 著者名 ユッシ バリッカ、梅田 拓也、大久保 遼、近藤 和都、光岡 寿郎	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 296
3. 書名 メディア考古学とは何か？	

1. 著者名 日本記号学会 (増田展大 (257、担当箇所: 特集編集))	4. 発行年 2023年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 260
3. 書名 生命を問いなおす	

1. 著者名 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館監修、川崎佳哉編（長谷正人（91-100））	4. 発行年 2022年
2. 出版社 フィルムアート社	5. 総ページ数 208
3. 書名 村上春樹 映画の旅	

1. 著者名 大久保 遼	4. 発行年 2023年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 358
3. 書名 これからのメディア論	

1. 著者名 小山昌宏・玉川博章・小池隆太編（増田展大（19-44））	4. 発行年 2022年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 409
3. 書名 マンガ探求13講	

1. 著者名 鈴木雅雄・中田健太郎編（増田展大（71-98））	4. 発行年 2022年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 480
3. 書名 マンガメディア文化論 フレームを越えて生きる方法	

1. 著者名 トム・ガニング（長谷正人（編訳、第8章）、松谷容作（第1章）、菊池哲彦（第2章）、川崎佳哉（第4章）、増田展大（第6章）、前川修（第7章））	4. 発行年 2021年
2. 出版社 みすず書房	5. 総ページ数 368
3. 書名 映像が動き出すとき 写真・映画・アニメーションのアルケオロジー	

1. 著者名 堀 潤之、木原 圭翔（川崎佳哉（109～121）、長谷正人（122～133））	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 312
3. 書名 映画論の冒険者たち	

1. 著者名 東京都写真美術館恵比寿映像祭 内田伸一（編）（長谷正人「映像とスペクタクル」を分担執筆）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京都写真美術館	5. 総ページ数 300
3. 書名 スペクタクル後 After The Spectacle 第14回恵比寿映像祭コンセプトブック	

1. 著者名 リサ・カートライト（長谷正人編訳・望月由紀訳）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 307
3. 書名 視覚文化叢書 8 X線と映画 医療映画の視覚文化史	



1. 著者名 伊藤 守 (大久保遼 (第12章))	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 402
3. 書名 ポストメディア・セオリーズ メディア研究の新展開	

1. 著者名 梅田 拓也、近藤 和都、新倉 貴仁 (大久保遼 (第8章))	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 280
3. 書名 技術と文化のメディア論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	菊池 哲彦 (Kikuchi Akihiro)  (10419252)	尚綱学院大学・総合人間科学系・准教授  (31311)	
研究分担者	前川 修 (Maekawa Osamu)  (20300254)	近畿大学・文芸学部・教授  (34419)	
研究分担者	加藤 裕治 (Kato Yuji)  (20633861)	静岡文化芸術大学・文化政策学部・教授  (23804)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	川崎 佳哉  (Kawasaki Keiya)  (50801792)	早稲田大学・坪内博士記念演劇博物館・助教    (32689)	
研究分担者	松谷 容作  (Matsutani Yosaku)  (60628478)	追手門学院大学・社会学部・教授    (34415)	
研究分担者	大久保 遼  (Okubo Ryo)  (60713279)	明治学院大学・社会学部・准教授    (32683)	
研究分担者	増田 展大  (Masuda Nobuhiro)  (70726364)	九州大学・芸術工学研究院・講師    (17102)	
研究分担者	角田 隆一  (Tsunoda Ryuichi)  (80631978)	横浜市立大学・国際教養学部（教養学系）・准教授    (22701)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関